

經濟叢論 每月一日發行
昭和十四年七月一日發行
大正十四年六月二十一日第三號郵政特准掛號

京都市帝國大學經濟學大會 經濟叢論

第十四卷 第一號

昭和十四年七月

(禁轉載)

京都帝國大學經濟學部創立二十年記念論集

田島・戸田・神戸・小川・河上・河田・山本・作田の前八教授肖像

記念展覽會及講演會寫眞

國家の社會的構成

完全豫見の問題

時局下に於ける農業計畫生産

世界經濟の動向

小工業の特質と其の助成方針

ナチスの經營共同體の理論及び構造に就て

徳川時代の經濟統制

信用理論と其の經濟的基礎

企業聯繫としての再保險

マックス・ウェーバーの國民主義

ロバートソンの物價變動理論

中小工業と市場

沒價值性理論の成立

政策學としての日本經濟學

日本經濟學の根本原理

經濟學部二十年を回顧して

經濟學部創立二十年記念經濟學會大會記事

彙報

外國雜誌論題

法學博士	河田嗣郎
文學博士	高田保馬
經濟學博士	八木芳之助
經濟學博士	柴田敬
經濟學士	大塚一朗
經濟學士	中川與之助
經濟學士	堀江保藏
經濟學士	中谷實
經濟學士	佐波宣平
經濟學士	白杉庄一郎
經濟學士	青山秀夫
經濟學士	田杉競
經濟學士	出口勇藏
經濟學博士	谷口吉彦
經濟學博士	石川興二
經濟學博士	本庄榮治郎

經濟學部二十年を回顧して

——特に田島・戸田兩先生を憶ふ——

本庄 榮治郎

わが京都帝國大學經濟學部は大正八年五月二十八日勅令第二百五十五號を以て創設されたものであるが、事實は京都帝國大學法學部より分離獨立したものであるから、その淵源はそれ以前の京都帝國大學法科大学に溯り得るわけである。法科大学の開設は明治三十二年九月であるが、三十三年九月に至つて田島錦治先生が歐洲留學を了へて教授として來任せられ、^(註)かくて明治年間には戸田・神戸兩教授が就任せられ、大正期に入つてから小川・河上・財部・山本・河田の五博士が教授として講壇に立たれ、經濟學部獨立の際には以上の八教授と小島・本庄の二助教授とが經濟學部勤務を命ぜられたのであつた。

(註) 田島教授來任前には米國歸りの新進の學者と稱せられた兒玉亮太郎氏が經濟原論を講じたといふ。此人は後に大學を辭して原敬氏の祕書役となり不幸早世された由である。¹⁾

然しこれより前既に大正四年七月には京都帝國大學經濟學會が組織され、其機關雜誌として「經濟論叢」を發行して居り、經濟學關係學科の充實は刮目に値するものがあつた。従つて法科大学の法律學科・政治經濟學科のうち、後者を政治學科と經濟學科とに分ち三學科制度にせんとする議もあつたが、大正八年二月東京帝國大學に於

1) 經濟論叢第三十九卷二號、118頁、山本教授の追懷談による。

て經濟學部が一學部として獨立するに及び、神戸・河上・河田三教授を創立委員として經濟學部獨立の議が進められ、遂に八年五月にその實現を見るに至つたものである。蓋し經濟學部の獨立はその淵源する所古く、一日にして成りしに非るを知るに足るであらう。

かくて獨立當時には八講座なりしものが、大正十一年五月に二講座増設されて現在十講座となり、教官は獨立當時八教授二助教授なりしものが、現在(昭和十四年五月二十七日)は九教授、七助教授、十三講師となり、學生收容定員は一百名から二百五十名に増加し、現在學生數は九〇五名、大學院學生二三名、卒業生は四五八二名を算ふるに至つた。また本學部教官の審査によつて經濟學博士の學位を受けたものは二十名である。本學部の研究設備は年を追うて充實しつゝある。教室並に研究室の増改築の如きも、その一面を示すものであるが、更に藏書數が現在約十三萬冊に及べるが如き、學部研究室が一般經濟・日本經濟・東方經濟の三室となり、外に、洋書圖書室及び各教官研究室を有するが如き、何れも二十年前に比して誠に隔世の感がある。更に研究發表の機關としては前述の「經濟論叢」の外に、大正十五年より歐文紀要 *Kyoto University Economic Review* を發行し、從來年二回刊行のものが本年より年四回刊行に改められ、既刊二十八冊に及び、世界の學界にその存在を認めらるるに至つた。また學生指導の設備としては明治時代から演習制度があつたが、大正十五年以來大に之を擴充し、殊に近年は殆んどすべての教授、助教授が之に當り、今や必須科目として更に一層の充實發展を見ることがとなつた。また本學部の規程が時勢の必要に應じて屢改正を加へられたことはいふ迄もなく、²⁾かくて人的・物的の兩方面に互つて設備の充實を見るに至つたことは誠に慶賀に堪えざる所である。

2) 大正十五年四月より學年試驗制度を改めて科目制度とし、昭和五年四月より授業科目を四類に分ち受験單位を三十單位以上とし、選科制度を廢止す。十四年四月東亞に關する科目を増加す。

更に本學教官にして學界の元帥府たる帝國學士院の會員に列せられた者は田島・神戸の兩先生であり、田島先生は嘗て大正十四年一月の宮中御講書始に於て洋書進講の光榮に浴せられ、神戸先生は昭和三年四月帝國學士院より恩賜賞を受くるの榮譽を荷はれた。而もこの兩先生共に定年制により退官されたが、尙山本・作田の兩教授も同様退官された。然しこれ等は所謂功成り名遂げて退官されたものといふべく、また小川先生は所謂象牙の塔より出で、政界に活躍せられ、嘗ては大藏政務次官として、後には商工大臣として顯要の地位に就かれ、河田先生は現に大阪商科大學長として、作田先生は滿洲國建國大學副總長として共に學界に重きをなして居られる。この間に於て戸田先生が大正十三年三月に、田島先生が昭和九年七月に何れも幽明境を異にせられたことは眞に痛惜に堪えざる所である。

二

次には少しく我學部の特色を述べたい。先づ第一に京都帝國大學は明治三十年の創立で東京帝國大學に比してその歴史は極めて新しい。歴史の新しい所は即ち青年的であり進取的である。わが法科大學も亦創立の際から洋行歸りの若手揃で新進氣鋭の最高學府として注目の的となつて居た。明治三十年に「最近經濟論」の著を以て名聲噴々たりし田島先生が留學を卒へて三十三年に講壇に立たれ、其後來任された戸田・神戸其他の諸教授、何れも一流の新進學者としてその専門の學を講ぜられたことはいふ迄もないが、前述の歐文紀要の刊行・演習制度の實施の如き全國何れの大學（法經關係）にも先んじて本學部に於て實施した所であり、研究に、發表に、學生の指導に、本學部が先鞭を着けてゐることは、學部の空氣が如何に進取發展的であるかを物語るものといふことが出来る。

第二に研究の範圍・指標としては勿論一般原理的研究ももとより盛んに行はれ、最新の學說の研究に力を盡されてゐる所であるが、また現實的に日本及東洋の事象を正視し且實證的に研究するの風が強かつたと思ふ。殊に戸田先生が日本及東亞の研究に力を致されたことは、其著「日本の社會」及「日本の經濟」によるも明かであり、神戸先生の「日本經濟政策論」「日本經濟論」の如き、或は田島先生の「東洋經濟學史」の如き、何れも其一例とするに足る。かくてわが京大經濟學部に於ては日本的若くは東亞的なる經濟學が、理論に於ても政策に於ても歴史に於ても、起らなければならぬ勢に在つたものといはなければならぬ。

わが學部の第三の特色は總力的であることである。何かの事を行ふ場合には全教授助教授其他が一致して事に當り、完全なるチームワークを達成する。このことはマルサス生誕百五十年、スミス生誕二百年の記念會に於ても、また「經濟論叢」の年々の新年號についても之を見ることが出来るが、最も注意すべきものは全教授及助教授が一齊に演習を擔當して學生の指導に當つてゐることである。嘗て福田博士は「經濟論叢」の記念號について『田舎芝居』と評された。その意味は樂屋總出で事をやる。即ち教授助教授全員が残らず一役を勤め協力して事に當ることを指したものであるが、所謂『田舎芝居』は學部傳統の美風であり、學部の全員は學部のためには何を措いても力を盡すといふ精神、即ち總親和總力戰の精神が既に早くから存在してゐたものといふことが出来る。

かくてわが經濟學部は何時も青年的な進取的な立場に立ち、日本的東亞的研究に力を注ぎ、而も私心を去つて學部のために共同一致の歩調を以て歩武堂々と進んで行く。之れあるが故に我學部は今日の隆運を迎へたものであると私は信ずる。

三

わが學部二十年間の來歴を回顧すれば、猶語るべき多くの事件乃至問題があり、前後二十年間の歩みが必ずしも坦々砥の如きものであつたとは考へないが、特に茲に附け加へなければならぬことは、前教授諸先生の偉大な業績である。然し私はそれについては既に故人となられた田島・戸田兩先生についてのみ、茲にその輝かしい遺業を追憶したいと思ふ。

田島先生は實に我國における近代經濟學の基礎を確立された一人である。それには田口卯吉・田尻稻次郎・天野爲之の三博士其他の大先達のあつたことは勿論であるが、田島先生が金井・和田垣・松崎・山崎等諸博士と共に、近代經濟學の建設者たることは疑なき所である。先生は從來のわが經濟學が主として英米の古典經濟學派の上に立脚したものであつたのに對して、獨逸・奧太利の學風を移入せられ、英米學派の如き演繹法に偏するを矯め、演繹法と共に歸納的研究の重んずべきことを説かれたものであるが、明治三十年に公にされた「最近經濟論」は當時經濟原論として最高峰たる地位を占めた名著であり、數年にして版を重ねること十版を出で、洛陽の紙價を高からしめたものである。

先生は壯年の頃には可なり進歩的な思想を持つてをられたが、年を経るに隨つて益々圓熟せる思想を持たれるやうになつた。嘗て先生が東大の課程を卒へて大學院に入られたときの専攻題目は「經濟學上の社會主義」であつた。當時かかる方面に注意する者の猶極めて稀なりしとき、先生は既に早く之を研究題目とされたのであつて、其の先見の明に服すると共に、先生がこの思想を克服して晩年にはマルキシズムに對して痛烈なる攻撃を加へら

れ、經濟と道德との關係を高調されたことは、社會思想に對する研究と其誤らざる批判との正しき道を、身を以て示されたものといはなければならぬ。

「經濟と道德との關係」と題する論文は大正三年五月刊行の「京都法學會雜誌」に公にされて居るが、爾來公私の講筵に於て屢この問題を説かれ、大正六年五月乃至八年九月の「經濟論叢」誌上に於て「經濟的行爲と道德的行爲との關係」を連載すること十二回に及び、此等の論文を纏めて昭和九年一月に「經濟と道德」と題する一書を公にされた。この書も亦社會の注目を惹き、昭和二年四月までに七版を累ぬるに至つた。同書の序文には

『現今文明諸國の世態人情を察するに、只管物質的の富を求むるに急にして、精神的の寶を蔑ろにし、個人的階級的の利益を謀ることを努めて、國民的世界的の幸福を度外に措く者甚多きが如し。(中略)而して有産階級の或者は往々不正手段に由りて其富を累ね、加之其一部を奢侈的に消費して世道人心を腐敗惡化せしめ、無産階級の或者は險惡なる思想に驅られて國意を犯し社會秩序を亂るあり。其原因は素より一にして足らざるべしと雖、世人が眞正なる經濟上の大利は、道德上の大善と一致すべきものなることを忘れたるに由ること、最も大なりと謂はざるを得ず』

といひ、また

『夫の功利を唱へて道德を度外に措き、陰に權門富豪に媚ふる者あり、又共產主義・社會主義を叫びて經濟を忘れ、陽に多數民衆の意を迎ふる者あり。斯の如き説は共に中庸を得ざるものにして余輩の與せざる所なり』

と斷ぜられ、自然の恩・父祖の恩・社會の恩・國家の恩・先覺の恩に對する報恩の思想を説かれてゐる。

而してこの經濟と道德との關係は、支那の孔孟の政治經濟思想によく示現されてゐる處から、先生は更に支那の經濟思想についても深き研鑽を積まれ、大正四年には「支那上古の經濟思想」及「孔孟の政治經濟說管見」を公にされたが、晩年にはこの方面の研究に精進せられ、東洋經濟學史の講義を擔當されて本學の一特色をなすに至つ

たものである。その成果は昭和十年一月刊行の「東洋經濟學史」一卷となつたわけであるが、今日のわが經濟學部における東亞經濟思想史の講義は決して昨今に起つたものではなく、その淵源する處の頗る遠きことを思はなければならぬ。それと同時に先生が、かくの如く經國濟民の本義と東洋道德との關係を明かにされたことは、後學の嚮ふべき指標を示されたものとして、東亞新秩序建設の聲高き今日、特に感慨に堪えぬものがある。

四

戸田海市先生は明治三十年七月東京帝國大學の法科を卒へ、三十四年京都帝國大學法科大學助教授となり、三十九年八月教授となられた。その公にされた論稿は極めて多いが、單行本として公刊されたものは「我獨逸觀」「合同」「工業經濟」の外、「日本の社會」「日本の經濟」の五冊である。歿後「戸田海市博士著作集」として編纂公刊されたものは「商業經濟論」「工業經濟論」「社會政策論」「特殊問題研究」の四冊であり、「特殊問題研究」に收録されたものは、取引所問題、貿易問題、勞働問題に關する若干の論文であつて、先生の好んで論議せられた戰時戰後の諸問題に關する論稿、支那問題についての意見、國民生活問題特に食糧問題、國民性に關する研究等は著作集には之を見ることを得ない。

先生の學風について一言するならば、よく書物も讀まれたが之を翻案するのではなく、寧ろ多く考へられたやうであり、多少抽象的ではあるが徹底的な議論をされた。然し議論の大前提を立つるがためには、よく事實を調査し實社會を觀察されたものである。故に先生の議論は政策論に於ても常に理論を離れず、事實を貫くに理論を以てせられたと同時に、よく社會の實相に觸れたものであつた。かの社會を見ざる所謂學者の空論とは雲泥の差

があつた。その専門の方面に於て注意すべき多くの論文のあることは勿論であるが、我國民性に關する研究の如きも、先生の議論は學界に大なる波紋を描いたものであつた。

明治四十三四年の交、先生はその獨得の思索に基いて我國民性の沒我的なる所以を説き、彼我社會の根本的差異を明かにするに力められた。即ち曰く⁵⁾

『凡そ東西文明の大差異を來たせし原因の中、彼れの個人的主我的なるに對し、我れの沒我的公共的なるの特性ほど大なる影響を有して居るものはない。國體や家族制度や風俗慣習や宗教道德や文學美術や、其根本的差異の由て來る所は、皆、主我・沒我的相違に在る。此根本的相違の結果として、西洋の社會は激烈なる階級戦と云ふ生存競争方法に由り、多大なる勢力の摩擦消耗を來たした後でなければ、社會は進歩するを得ざるに反し、我國は古來より國民各部の勢力の統一調和が割合によく保たれ、從て社會の進歩は概ね舉國一致の有様で圓滑平穩に行はれたのである』

『本來沒我的公共的なる我國民性は覺醒するに従つて益明確強固なる公共性社交性となり、特に忠君の外に張き愛國の情が高まつて來る。又勿論消極的盲從より積極的貢獻となる』

かくて議會政治にしても地方自治制にしても、國民の權利義務觀念にしても、西洋のそれとは甚だ異なる發達をなしたが、これは全く我國民性の西洋と異なる結果であり、彼我社會の根本的差異は全く主我的なると沒我的なるとに在る。

『沒我的な我國では、或程度以上に各人自我を主張しない。全體の利益のため容易に自己の一部を犠牲に供する。我國の維新以來、舉國一致で長速に進歩した様なことは到底も西洋では望まれない。』⁶⁾

かくの如く我國は西洋に比して沒我的であり、從つて又團體本位であり、主我的な西洋人には忠孝仁愛又は義俠の意義を解し得ないのが普通であるとし、更に日本文明の發展性に論及して曰く⁷⁾

5) 「日本の社會」22頁 25頁
6) 同上 61頁
7) 同上 77頁 80頁

『強大なる國民民族は異種文明に接觸しても其根本性を一變することなく、却て之に由て其缺點を補ひ、益々其根本性を圓滿完美ならしむるものである。我國民も亦此の如き強大なる民族であることは、過去における支那文明や印度文明を攝取し、巧みに之を利用してその根本性を圓滿鞏固ならしめた歴史を見ても分る。維新以來盛んに西洋文明を輸入しつつあるが、一部の急進家は、全然西洋流其儘に之を輸入消化せんと努めて居る。然るに一旦西洋の文物が我國に輸入せられて、一般民衆の間に勢力とならんとするに至れば、忽ち日本化せられんとすることは、吾々の眼前に實驗しつつある所である。』

『適當の範圍に於て異種文明を攝取すること、國粹の保存又は日本主義の發展に必要である。』

と斷ぜられて居る。尙大正二年十月の論稿に於て我國國民性を再論し、次の四項目の特徴を擧げられた。その要旨は次の如くである。⁸⁾

一、彼我の倫理思想が數多の點に於て互に一致せざる所以の根本は、彼に在ては價値の基本を個人自身の上に置かんとする主我的傾向の強きに反し、我に在ては之を社會團體就中民族の上に置かんとする團體本位傾向の強いことである。

二、此兩主義は理論上其間に絶對的の優劣を定め得べきものでないこと。吾々は奮勵努力して此根本主義を發展完備せしめねばならぬ。我が根本主義は天地の間何物にも換ふべからざる貴重な我が生命であるから、如何にもして之を完全無缺のものとなせねばならぬ。

三、強大なる國民の根本の傾向又は主義に至つては、甲を捨てて乙に移ると云ふが如き變化を生ずるものではなく、それ自身時勢に應じて發展するものである。團體本位の主義は建國の始めより社會組織の上に現はれ、其後支那印度の文明を輸入するに方つても、之を我が根本主義に由て消化し、特に此等の文明における非國家的・非民族的要素を弱めて之を我が根本主義と調和せしめたのである。

四、我が文化を發達せしむるには、固有の長所を發揮すると同時に歐米の長所を盛んに採用せねばならぬ。吾人は、歐米の文化を採用する方法は、之を我根本主義に由て消化するの外はない。換言すれば團體本位思想を捨てるのではなく、之をして時勢に適當するが如く益完全ならしむるが爲めの手段として、相對的に彼の主我的要素を取り入れる事は、恰も西洋に於て個人主義を完全ならしむるが爲め、相對的に沒我の要素を取り入れるが如くせねばならぬ。

先生が誌上に發表された經濟政策的論稿に於ても、例へば農工商武併立論の如き、或は維新以後の産業の發達

8) 京都法學會雜誌第八卷十號「我が國民性に付て」

が多くは歐米模倣の産業に限られ、我國の固有産業或は日常生活に緊密なる關係を有する方面の産業が發達し居らざることを指摘し、固有産業の發達を論ぜられたるが如き、その他種々なる論文に於て先生の日本主義的論調を見ることが出来る。

先生は又夙に支那問題に留意せられ、日支經濟關係の真相、支那の富源開發、支那に對する投資等幾多の論文を公にされてゐるのみならず、大正四年頃より東方經濟研究所設立の急務なる所以を力説せられ、之を我が京都帝國大學に設置することに力められたが、之は不幸にして實現するに至らなかつた。その設立趣意書の一節に

『我國にして苟くも歐米各國と競争して支那の市場に優勝の地位を占め、以て我國力の發展に努むると同時に、世界に於ける我國民の責任を果さんとせば、必ずや東方各地の經濟事情を調査して之に適應すること、尙ほ國內の事情に於けると同一の程度に達するの覺悟なかる可らず。而して此目的の爲めに、吾人の必要とする調査研究には二種あり。一は政治又は經濟等の當面の實用を充す爲のものにして、他は此の如き卑近の實用を超越せる學問上の根本的研究なり。然るに此兩者は本來密接不離の關係を有するものにして、夫の當面の實用を主眼とするものにありても、若し直に其實用の目的を達して遺憾なからしめんとすれば、必ずや其根柢を系統的なる學問上の研究に求めざる可らず。今雖て我國の現状を見るに、東方經濟の調査研究は一般に猶ほ甚不完全なるを免れず。加ふるに其主なる部分は、多く當面の實用的のものに限られ、系統的なる學問的研究に至りては實に甚だ幼稚にして、殆んど専ら歐米學者の不完全なる研究に依頼するの外なき狀態にあり。此の如きは東方に於ける我國の特殊の地位より見て、最早や一日も忍ぶ能はざる所なり』

とある。最近東方經濟又は東亞經濟研究の機關は多く設けられつつあるが如きも、先生は既に約二十五年前に之が必要を道破されて居たのであつた。その達識明敏なるを知ると共に、かかる機關がその當時に於て設置されて居たならんには、今日に於てその貢獻する所如何に莫大なるものありしならんと慨嘆に堪えざる次第である。

先生は學者であつたが、一面には眞に國士の倂があつた。先生は常に深く思を我國の國策に致され、議論の最

後の目標は常に我國家を奈何にせんといふ點に在つた。後年に至つて屢當路者にその論策を建言されたのみならず、世界大戰中、關西聯合の商業會議所の調査事業に關係して我が國策の樹立に努め、また大阪市の勞働調査事業にも關係して之が大成に寄與せられた點が甚だ多い。また政治家、實業家が先生の意見を求めたことも屢々であつたと聞く。更に後進學生に對しては常に諄々として之を説き熱心懇切に指導啓發せられたものである。例へば我々の提出したつまらぬ研究に對しても一週間乃至十日位の間に必ず之を讀まれ、批評や訂正の文句を小さい紙片に細々と書いてその所々へ貼り付けられ、この澤山な付箋に對して相手が納得するまで諄々と説明せられた。他の用事で先生の御宅を訪問したときでも、先生は必ず先生が考へられてゐる當面の問題について一時間以上も述べられたものであつた。それで先生の御宅を訪問すれば、その辭去する際には常に必ず學問上の何物かを得て歸るのであつて、このことはやがて戸田先生の偉大さを物語つてゐるものと思ふ。先生は青年時代に苦學力行せられたやうであるが、其學識と人格とは當代稀れに見る處のものであつた。西田幾多郎博士が先生を以て『眞摯に深く考へる國土的學者』と評されたことは肯綮に當つて居る。⁹⁾

五

以上私は經濟學部二十年の歩みを回顧し、特に田島先生と戸田先生との景仰すべき人格と先人未到の業績とを簡単に説述した。嘗て神戸先生は田島先生について¹⁰⁾

『先生の學識は爛漫たる櫻の類にあらずして、馥郁として香り高き梅の如きものに屬す。而も此香氣は瞬時に霧散せずして永代不滅なり（中略）先生は京大の開設するや招かれて最初の經濟學教授となり、經濟學部の獨立するや推されて一次の學部長とな

9) 經濟論叢 第十八卷四號 西田博士「戸田海市君の追懷」
10) 同誌 第三十九卷 二號 106頁

る、我學部の今日ある先生の力に負ふこと最多し。(中略)先生は實に關西經濟學界の長老として學徒崇敬の中心たり』と述べられ、また福田博士は戸田先生について¹¹⁾

『獨り其學問を以てのみならず、其の人格を以て、京都經濟學のパイオニアであると共に、之を取圍む人々を學究的パラダイスの住人たらしめた一恩人であると思ふ』

と述べられてゐることは、兩先生が如何に、わが京大經濟學部の柱石であつたかわかると思ふ。

最近殊に滿洲事變以後、日本研究や東亞研究が喧しく唱えられ、日本經濟學建設の問題、東亞新秩序の確立に資すべき研究が、我國現在の切實なる要求となつて現はれて居るが、それ等のことは、わが經濟學部に於ては田島・戸田兩先生を中心として四半世紀以前に於て既に顯現しつゝあつた事柄である。我々の日本研究及東亞研究はかゝる傳統を繼承して發展せるものであつて、昨今の時勢に便乗して俄か仕込みの研究に浮身を俏してゐるものではない。その淵源する處、實に遠く、その態度の極めて眞摯であり堅實であることを知らねばならぬ。然し我々はたゞ徒らに過去の事蹟を説くのみであつてはならぬ。今後更に人的・物的設備の充實を計り、我經濟學部傳統の學風を護り立て、國家の須要に應ずる研究を大成するの覺悟がなくてはならぬ。それと同時にわが學部の今日ある所以は全く前教授諸先生の努力の賜である。實に羅馬は一日にして成らず、わが學部も亦上述の如き淵源を有する。我々は田島先生の所謂『先覺の恩』を知り、深き感謝を捧ぐると共に、その恩に報ゆる所がなくてはならぬ。それは即ちわが學部の一層の充實發展を期する以外には何物もないと信ずる。學部二十周年に當り所懐の一端を述ぶるの機を得たることを光榮とする次第である。